

## 書

## 評

北川勝彦著

『南部アフリカ社会経済史  
研究』

関西大学出版部 2001年 380ページ

よしくにつねお  
吉 國 恒 雄

## はじめに

アフリカ経済史をテーマとする本書の魅力のひとつは、社会科学の「オーソドックス」な関心と手法に極めて忠実であることにある。今日盛んになりつつあるポストモダンの思潮は、文化（言語）をキーワードにし、価値の相対化と通史的歴史の批判を行うが、本書はそれと対照的に、経済（人間生活の物的生産と再生産）をキーワードにし、客観としての過去の発見と再構成の方向に関心を向ける。ここにあるのは、単なる伝統的方法への固執という後ろ向きの姿勢ではない。むしろそこには、このようなアプローチを推し進めることによってこそ、われわれは、北半球の興味と価値という狭い窓からアフリカを眺めるといふ危険（たとえば、近年広範にみられるアフリカをもっぱら異文化理解の対象、あるいは開発と援助、紛争研究の対象とする視点に潜む危険）からより自由となり、アフリカの社会と歴史にもっと正面から向かい合えるようになるに違いない、という著者の極めて今日的な信念と主張がある——明言されているわけではないが、評者にはそう読めた。

本書は、経済史家北川勝彦氏の研究論文と研究ノートを一大集成したものである。1974年発表の初期の論文から、本書のために書かれた最新の論考までが収めてあり、四半世紀にわたる同氏の知的活動がここに集約的に示されている。彼の日本・アフリカ通商関係の研究はすでに本のかたちで上梓されているが〔岡倉・北川 1993；北川 1997〕、そのもうひと

つの研究分野であるアフリカ経済史をめぐる仕事もまた、本という、より多くの研究者と読者が手にしやすい姿をとったことは喜ばしいことである。

## I

本書の内容は、次のように構成されている。各篇の初出を括弧で示しておくが、かなり加筆されたものもあることに留意すべきである。

## 序 アフリカの世界を考える

（北川勝彦編『<南>から見た世界3  
アフリカ 国民国家の矛盾を超えて  
共生へ』大月書店 1999年 15～46ページ）

## 第1部 サハラ以南アフリカの経済史概観

[序] アフリカ経済史研究の課題——ゼレザの近業から——  
（本書初出）

## 第1章 18世紀のアフリカ経済

（関西外国語大学『研究論集』第39号  
1984年 193～207ページ）

## 第2章 19世紀前半のアフリカ経済

（関西外国語大学『研究論集』第40号  
1984年 415～436ページ）

## 第3章 19世紀末から20世紀中葉のアフリカ経済史点描

（岡倉登志編『アフリカ史を学ぶ人のために』世界思想社 1996年 42～68ページ）

## 付論1 大西洋奴隷貿易とアフリカにおける奴隷制

（関西アメリカ研究会編『アメリカン・ラビリンス』玄文社 1986年 19～40ページ）

## 第2部 19世紀中葉から20世紀初頭の南アフリカ経済

[序] 19世紀の南アフリカ史  
（本書初出）

## 第4章 イギリスの対南アフリカ投資——鉱山開発と鉄道建設——

## 書 評

- (矢口孝次郎編著『イギリス帝国経済史の研究』東洋経済新報社 1974年 217~240ページ)
- 第5章 南アフリカにおける金鉱業の発展 1886年~1914年  
(関西大学『経済論集』30巻1号 1980年 17~34ページ)
- 第6章 南アフリカにおける銀行業の発展——スタンダード・バンクを中心にして——  
(関西外国語大学『研究論集』34号 1981年 151~164ページ)
- 付論2 南アフリカ経済史研究の展望  
(本書初出)
- 第3部 19世紀末から両大戦間期における南部アフリカの社会と経済
- 第7章 ジンバブエ社会経済史研究の課題——フィミスターの所説をめぐって——  
(『アジア経済』第32巻第6号 1991年 6月 83~90ページ)
- 第8章 南部アフリカにおける植民地経済の建設とイギリス南アフリカ会社  
(『アフリカ研究』23号 1983年 70~81ページ)
- 第9章 植民地期南ローデシアにおける白人移民社会  
(木畑洋一編『大英帝国と帝国意識』ミネルヴァ書房 1998年 201~235ページ)
- 第10章 植民地期南ローデシアにおける鉱業の発展とアフリカ人の移動  
(池本幸三編『近代世界における労働と移住』阿吽社 1992年 233~236ページ)
- 付論3 南ローデシア植民地形成期におけるキングズレー・フェアブリッジ  
(栗本永世・井野瀬久美恵編『植民地経験』人文書院 1999年 170~196ページ)

以上の一覧から分かるように、本書は3部から構成されており、第1部はアフリカ全般、第2部は南アフリカ、第3部はジンバブウェなどの南部アフリカ地域を対象とする。取り扱われている時代は主に、19世紀、あるいは植民地化前夜から現代までである。

## II

第1部のかなりの部分は、著者がもともと準備していた「現代アフリカ経済史研究」のための草稿がベースになっているので、アフリカの過去についてかなり記述的である。この他にも、第4章「イギリスの対南アフリカ投資」、第5章の「南アフリカにおける金鉱業の発展」など、記述的内容の多い章があるが、しかし全篇を通じて認められる傾向は、「社会経済史」そのものの記述よりも、「社会経済史研究」についての研究という性格が濃厚であることである。言い換えると、本書の内容の中心的部分は、研究の歩みをさかのぼり、人々の「過去に対するまなざし」の変化を明らかにし、次に、解釈と議論の錯綜した状況を解きほぐして、問題のポイントを整理し、著者のコメントを加えつつ将来の研究課題を提起するという一連の作業によって成り立っている。

このことから、アフリカ研究者にとって本書の読みどころが奈辺にあるか、推測がつくかもしれない。そのひとつは、書誌学的領域に関してであろう。著者は、論考の出発点となる足場を確実にするため、先行研究を精力的に調べ、それを丹念に目録化し、必要ならば寸評をも加える。その専心はたいへんなものであって、このことは、本文270ページほどに対して巻末注が82ページもあるという点によく示されている。具体的に例を挙げれば、18世紀以降のアフリカ経済の変遷を対象とする第1章から第3章までの議論は、主としてマンローの『アフリカ経済史 1800-1960』[Munro 1976]の論点を押さえながら展開される。しかし著者は、マンローの著作以降のアフリカ内外で進められた研究の成果、特に1970年代以降に台頭するラディカル社会経済史派の業績を丹念にフォローし、それを逐一紹介し、しかもまた、関連分野での日本の研究者による仕事にも注意を促すの

## 書 評

である。最後の点は、たいへん有り難いことであって、これによって（評者を含めた）読者は、わが国のイギリス帝国史研究などの経済史研究の伝統の長さや厚みを教えられる。

到達した知のレベルを正確に測ること——社会科学ではあたりまえの作業と言うなかれ。口幅ったいことを言うようだが、日本のアフリカ研究の世界（少なくとも社会科学と歴史の分野）では、その「あたりまえ」が必ずしも「あたりまえ」になっていない。アフリカや欧米の大学では、アフリカを学ぶものであれば学部生の時からたとえば『ジャーナル・オブ・アフリカンヒストリー』をよく手にするのだが、評者の知るかぎり、こうした雑誌に掲載される論文に日頃から注意を払っている日本のアフリカニストは極めて少ない。当然の結果として、すでに海外では何十年も前に否定された旧説、脚注のない理論、アフリカの知識人からは失笑を買うにちがいない解釈が堂々まかりとおるといふ事態になる。こうした状況の中にあっては、先行研究を踏まえるということ自体が、実は研究者の「突出した」構えを要件とせざるをえないのである（著者のこの姿勢が、アフリカ研究というより、経済史研究のアカデミズムの中で練り磨かれたものであることが本書から見てとれるが、これはこれでなかなか意味深長な事実である）。

書誌学の大事さをよく示しているのが、付論2「南アフリカ経済史研究の展望」である。本文17ページほどの小論であるが、学ぶところが多い貴重な労作である。著者は近年南アフリカ・ナタール大学に腰を落ち着けて学究生活を送ったので、この折りの「現地体験」の強みを生かした論考であると思われる。1990年代に政治的・社会的激動を経験した南アフリカにあっては、「過去に関する研究も、また、これまでにない広がりや深まりを持った変化を経験」（153ページ）した。本論は、この学問研究の大きな境目を、1980年代後半から90年代後半までに現れた経済史の著作を中心にして、描き出そうとする。そこでは、現代南アフリカ経済と独占企業、農業と農村社会、鉱業と製造業、19世紀植民地経済史などの分野ごとに研究動向が詳述される。また、それらを、自

由主義学派とラディカル派の伝統的な論争（資本主義発展はアパルトヘイトを必要条件とするかどうか）とその新たな展開という太い縦系にからませながら、吟味するのもさすがである。南アフリカ研究に踏み出しつつある研究者や大学院生にとって、恰好の糸口になるであろう。

## III

書誌学的側面と対をなすもうひとつの本書の読みどころは、それがアフリカ史のポレミックを簡潔にして包括的に提示している点にある。そもそも、経済史とはポレミックなものである。政治史、文化史、宗教史などと比べればよく分かるが、歴史研究の中でもっとも抽象度の高い分野であって、経済学と同じように言ってみれば、量的関係を扱い、真理の客観性を主張する。明晰であるのだが、その分危うさを伴い、しばしばそれを否定する論理によって挑戦される（本書のタイトルのように、「経済史」の前に「社会」が冠せられることがあるのは、その「危うさ」への自覚を表現したものに違いない）。そこに経済史、そして本書を学ぶ醍醐味のひとつがある。

たとえば第1部に示されるマンローの時代区分である。アフリカ（あるいはその一部地域）の過去を区分するにあたって、史家の考えはなかなか一致しないものである。それは、彼らの尺度があまりに多様であるからである（また、史学が、北半球ほど制度化、体制化、定式化されていないことも一因である）。しかし、マンローや多くの経済史家は、混沌とした観を呈する過去を、資本の蓄積様式と、それに対応する世界経済とアフリカとの関係を主な基準にして、ズバリと割り切って区分する。商業資本主義の時代（1500～1780年）、初期産業資本主義（1780～1870年）、成熟期産業資本主義（1870～1939年）、そして戦後国際経済というようにである。そして、それぞれの階梯に、奴隷貿易と環大西洋経済圏へのアフリカの組み込み、「合法的貿易」と中枢との直接的・垂直的関係の発展、植民地経済と世界経済への全面的・従属的統合、前者の継続とその克服の努力といったテーマが割りあてられる。アフリカの

## 書 評

経験を見事なまでに整理するやり方であって、大枠において、この区分が多く政治・社会・文化・経済現象の説明に役立つことを否定する人はいないであろう。だが、ただちに生起する問題は、それが見え難くする、もしくは歪めて見せる領域がありはしないか、その有用性の限界をどこに定めるか、ということである。著者が各所で指摘するように、この区分の背後にある発想と、大陸の地域差の問題、前植民地期・植民地期・ポスト植民地期と続くアフリカ人農村経済の問題、アフリカの社会史・民衆史などとはどうも折り合いが悪そうである。このように定立と反定立の間を揺れながら、われわれの認識は大いに深められるのである。

本書の所々に散りばめられた論戦紹介を読みながら評者は、1970年代末から80年代アメリカ合衆国とジンバブウェの大学・大学院で勉強した頃の講義やクラスの様子を思い出した。大西洋奴隷貿易とアフリカ奴隷制についての付論1では、あの白熱し、ほとんど殴り合いまでになりかけた合衆国での授業を。H教授が、カーティン(P. Curtin)による大西洋奴隷貿易の計量化の仕事を高く評価し、カーティンの計算によれば、売買された人間の総数は1000万ほどであった、と話した時である。突然机を叩いてアフロアメリカンの学生が立ち上り、大声でまくしたてた。「それはおかしい。その数はどうやって到達したのか。捕獲時や中間航路で死んだ人間の数も入っているのか。すべての航海記録をカバーしているのか」。カーティンの説と、売買総数を数千万、ときには億以上とする従来の説とのあまりに大きな差が、この黒人学生を「不規則発言」に駆ったのであろう。教授がこの行為をたしなめると、クラスは白黒の二陣営に分かれてにらみ合いになった。次の週、教授は、カーティン、フェイジ(J. Fage)、ロドニー(W. Rodney)、イニコリ(J. Inikori)、ウゾイグウェ(G. N. Uzoigwe)などを巻き込んで展開された奴隷貿易とそのインパクトについての論争を紹介したが、やはりその内容(たとえば、フェイジの、奴隷貿易は西アフリカ内陸の一部の国家の発展に貢献したという主張)をめぐる怒号とヤジが飛び、講義は再三中断を余儀なくされた。いろいろ評すことができよ

うが、いずれにせよ、人々がまだ「奴隷貿易」が生きていることを痛感させられた事件であった。

本書の第7章「ジンバブエ社会経済史の課題」は、1980年代初頭、独立直後のジンバブウェ大学史学科を包んでいたあの熱い雰囲気を思い出させた。当時教員や学生によって熱心に語られていたのは、「ルイス＝バーバー理論を批判したジョバンニ・アリギヤロビン・パルマーの研究」(174ページ)であった。アリギ(G. Arrighi)の理論は、一言でいえば、従属論のジンバブウェへの適用であって、アフリカ農村の「後進性」は、近代主義者の解釈とは反対に、始源の状態ではなかった、植民地国家と資本によって「開発」された「低開発」の表現に他ならないとした。その頃英国で学位を取得し帰国したばかりで、最左派で知られた(しかし今や老人化してビジネスマンに墮したと若手から評されている)M博士の経済史のコースに至っては、期末試験の問いのほとんどは、アリギの所説(プロレタリア化に先行する小農繁栄期の存在、本源的蓄積における非経済的強制の役割、アフリカ人無産化の特殊性、低賃金・出稼ぎ労働制の根拠など)にかかわるものであった。なぜこうした思想が人口に膾炙するのか、ほとんど説明は必要なかろう。アフリカの農村あるいはその社会の貧しさの理由、そこからの脱却の道筋、また国の民主化の性格と展望について理解したいと皆が切望しているからである。

このように、経済史のさまざまなボレミックは、すべてとはいわずとも多くの場合、灰色のスコラ談義や瑣末主義では決してなく、現代アフリカにおいて進行している「過去との対話」そのものなのである。評者は、アフリカ史を学ぶ、あるいはアフリカを理解するとは、こうした(北半球の住民にはしばしば分かりがたい)対話にきちんと耳を貸すことだと思っている。この意味で、論戦と学説史が満載されている本書は、初心者にはとっつきやすい印象を与えないだろうが、じっくり読んで自分の頭で考える人(必ずしもアフリカニストとはかぎらない)にとっては、たいへん有益な書になるであろう。評者は、担当する「アフリカ史概論」のクラスの必読図書リストに、本書の第1部を加えることに決めた。

## 書

## 評

## 文献リスト

## &lt;日本語文献&gt;

岡倉登志・北川勝彦 1993. 『日本・アフリカ交流史 明治期から第二次世界大戦期まで』同文館出版.

北川勝彦 1997. 『日本—南アフリカ通商関係史研究』国際日本文化研究センター.

## &lt;英語文献&gt;

Munro, J. F. 1976. *Africa and the International Economy, 1800-1960*. London: J. M. Dent (邦訳は北川勝彦訳『アフリカ経済史 1800-1960』ミネルヴァ書房 1987年).

(専修大学商学部教授)